全ては無・・・

ロードスレイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全ては無・・・

【Ｎコード】

Ｎ２１４９Ｃ

【作者名】

ロードスレイ

【あらすじ】

これはある普通の中学生がある出来事によって未知なるものと戦う物語・・・・・

プロローグ

―プロローグ―

俺は今最後の敵と戦っている。

そう、例えるなら「無」と戦っている。

全ては無から始まり無で終わる・・・。

ならばそこに戦う意味は無いのだろう。

しかし今を生きるものにとっては意味のある戦いである。

すこしでも長く今という時を感じたい。

今という時がある限り「無」では終わらない・・・・・

そう俺は「無」という存在を倒すためにここにいる。

これはある一人の少年の物語・・・・・・

プロローグ（後書き）

初投稿です。
小説も書くのは初めてなのですごく下手かもしれませんがよろしくお願いします。
この作品は・・・まぁ言ってみればドラ○エみたいなものですね^^;

第1話（前書き）

これは普通の中学生がある出来事によって
未知なる世界に旅立つ少年の物語・・・・・・・

第1話

俺はの名前は、衛藤(えとう)　明(あきら)

普通の中学校で普通に暮らしているただの学生である。

あの日までは・・・・・・・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――

今は昼休み、昼食を食べ終え一人で廊下を歩いていると

「お～い、アキラ～今日帰りにゲーセン行かね？」

俺の友達が後ろからやって来てそう言った

「わり～。今日店の手伝いあるんだわ」

そう俺の家は、しがない居酒屋をやっている

主に雑用なのだが、人並みには作れるらしく、たまにではあるが

親父の横でつまみなんかを作って客に出したりしている

「そうか、誘って悪かったな～」

と言い廊下を走って行き俺の前から消えた

おそらく他のやつでも誘いに行ったのだろう

などと考えてるうちに予鈴のチャイムがなった

「お～い、その皿取ってくれ～」

「あいよ～」

学校も終わり家に帰った俺はあいかわらず雑用をやっている
客も6、7割程いる時

「アキラ、ちょっと買出し行ってきてくれ」
と親父が俺に言った
「えぇ～今から～？」
そう今は午後9時過ぎでこの時間に開いてる店はここらへんには少ないのである

「頼んだぞ、ここにメモと金置いとくからな」
と言ってカウンターの上に置いた

断ろうかと思ったのだが、皿洗いよりはましだろう
「わかったよ、そのかわりちゃんと小遣いくれよ」
「な～に寝ぼけた事言ってるんだ、ほらさっさと行け」
「はいはい」
俺は微笑しながら言って、店を出て行った

第1話（後書き）

まだまだ最初ですが小説って難しいですね^^;

第2話

店を出た俺は自転車でコンビニやスーパーなど
いろいろ行ったり来たりしている

ちょうど交差点で信号を待っている
俺は親父にもらったメモを見ていた
「あとは頼んである日本酒と焼酎か・・・・」
「入んのか？これ・・・・」
前のかごにはさっき買った物でいっぱいだ
「まぁ押し込めば大丈夫か」
と独り言を言ってる間に気づけば信号は青になっていた

もう時間は午後１０時になろうとしている
なのにこの辺りはにぎやかで人も沢山いる
さすがに自転車では行きづらく歩いてわたることにした
ちょうど道路の真ん中を通ろうとした時
「や・と・見・・け・・・」
不意に老人の枯れたような声が後ろから聞こえたような気がした
「・・・・っ」
その言葉に反応したかのように俺は後ろに振り向いた
しかしそこには老人の姿は無く若い大人たちが歩いているだけだった
「？？？、なんだったんだ？今の声は・・・・」
と考えていると信号は点滅していた
「やべっ！」
俺は自転車に乗りペダルに力をいれ交差点をあとにした

「ただいま～」
俺は買出しをすませて家に戻っていた

「おう、全部買ってきたか？」
「ああ、買ってきたよ」
俺は買ってきた物をカウンターの上に置いた
「おう、ごくろ～さん」
俺はすぐに自分の部屋へ行こうとした
「ちょっと待て、アキラ」
親父に呼び止められた
「な、何？」
「釣り」
親父が手を前に出して言った
「ちぇっ」
俺はポケットに手を入れお釣りを出した

俺は部屋に入ったとたん自転車で走り回ったのが疲れたのか
ベットに寝転んでいた
しかし、今は疲れよりもあの「声」が気になっていた
ただの空耳だろうと思うのだが・・・・・
何故か印象に残るような不思議な声だった
と考えているといつの間にか俺は眠ってしまった・・・

第2話（後書き）

皆さんまだここまでですがどうでしょうか？
やっぱり下手ですかね・・・
できれば感想など書いてやってください

第3話

俺は目を覚ました
いや正確にはまだ夢の中だ
俺は夢の中で目を開けた

起き上がりあたりを見渡すと
そこは暗闇だった
深い深い黒一色しかなかった
俺は歩き出した
どこへ向かうわけでもなくただ前へ前へと歩き出した
ここが何処なのかはあまり気にしなかった
どうせ夢だろうと思っている

もうどれくらい歩いたのだろう
俺はこの世界を延々と歩き続けている
何処まで行っても黒一色しか無い
それどころか暗闇はより深さを増すばかりである

どんなに歩いても疲れることは無い
夢なのだから当然であろう
疲れないために止まる理由も無く
ただ暗闇を延々と歩き続ける

そんな時一点の白・・・・光が見えた
俺はその光に吸い込まれるかのように歩いていた
少しずつ光が大きくなっていき
やがて光が俺を包み込んだ
さっきの暗闇が嘘かと思うくらい

白一色しかなかった
その白い世界でも俺は歩き続けた

しばらく歩き続けると
突然台風でも来たかのような
突風が俺の前から吹いてきた
俺は反射的に目を強く閉じた
風が止み恐る恐る目を開けた

眼前に広がる世界は
荒野だった
木も草も生えていない荒れ果てた荒野
しかしそんなことはどうでもいい
今は目の前で起きている異様な光景が気になっていた

沢山の人・・・・いやゲームとかで言う兵士や戦士
魔法使いなどが何かと戦っている
そこには老人や女性ましてや子供までもが戦っている

戦っている相手はなんというかこの世のものとは思えないほどの
とても巨大で大きなやつと戦っている
中には小さなやつも大きなやつもいる

「こんな夢を見るなんてゲームのしすぎかな」
俺は微笑しながら言った

そのとき一つの光が俺目掛けて飛んできた
俺は避ける間もなくその光に当たった
その光は俺の中に入るかのように消えていった

「な、なんだ？」
俺は自分の体を見回した
しかし何処にも変化は無い
俺はあの光のことを考えていると
不意に一人の男が振り向いて何かを叫んでいた
その瞬間この世界が崩壊したかのように崩れていった

「ア・・」

「ア・・ラ」

「ア・キラ」

「アキラ！！」
「うお！？」
俺はベッドから飛び起きた
「や～っと起きたか」
俺は寝ぼけたままあたりを見渡した
そこはいつも通りのお俺の部屋だった
目の前には親父がいる
「さっさと行かねぇと遅刻すっぞ？」
「へ？」
時計を見てみると午前8時を過ぎていた
「うわぁ！何で起こしてくんなかったんだよ！」
俺は猛ダッシュで制服に着替えた
「何言ってやがんだ、あれだけ起こしても起きないお前が悪い」
俺は急いで焼いてあったパンを手にとって玄関を飛び出していった
「お、おいそれ俺の・・・・」
「いってきま～す」

俺は親父の言葉を無視して学校へ走っていった

第3話（後書き）

今回のは夢ばっかでしたね^^；
小説の書き方でおかしいと思うところは
どんどん言ってください^^

第4話

俺はダッシュで走ったおかげか
何とかぎりぎりで学校にたどり着いた
ちょうど予鈴のチャイムがなった

俺は走り疲れたせいか自分の椅子に座るなり
机に覆いかぶさるように崩れ落ちた

「ア～キラ～、今日はぎりぎりだったなぁ」
俺の友達の慎吾(しんご)が歩いて来てそう言った
この前ゲーセンに誘ってきたやつだ
「なんだぁ見てたのかぁ」
俺はしんどそうに言った
「あぁバッチリとな」
「窓からかぁ？」
「い～や後ろからだ」
「後ろっておま・・・・って遅刻したのかよ」
俺は微笑しながら言った
「あぁおかげで反省文だ」
慎吾も微笑して言った
「うちの学校って遅刻したら反省文だっけ？」
「いや何せ俺は遅刻しまくりだからな反省文も書かされるさ」
「自業自得ってやつ？」
俺と慎吾は顔を見合わせてお互いに笑った

「ん？なんだそれ？」
「何が？」
「手に付いてる黒いやつだよ」

慎吾が俺の右手を指差して言った
「？」
俺は右手の袖を上げて右腕を見てみた
「へぇ～それタトゥ？」
そこには肘(ひじ)の辺りから手首の所まで
黒い龍のような模様が浮かび上がっていた
「中学生がやって良いものなのかねぇ？」
慎吾は微笑しながら言った
「ばれなきゃいいんだよ」

俺はそう言ったがこの模様には見覚えが無い
ましてや俺がタトゥなどいれるはずも無い
しかし現にこの模様は俺の右手に描かれている
慎吾に言っても多分信じないだろう
突如として俺はあの夢を思い出した

暗闇の中を歩き続ける・・・・・
（いや、そこじゃない）
俺はそう心の中で言った
光が俺を包み込んでいく・・・・・
（光・・・・そうだ光だ！
確か光が俺の中に・・・・・）
そう心の中で言っているとき
扉がガラガラと音を出して開いた
このクラスの担任が入ってきた

「はい、席に着きなさい」
俺はあわてて袖を下ろした
みんながあわてて自分の席へと戻っていった
「きりぃつ」

全員が一斉に立ち上がった
「れい！」
「おはようございます」
全員が声をそろえて言った
「はい、おはよう」
「着席」
全員が椅子に腰を下ろした

「え～と明日は・・・・・・」
先生が何か言っている中俺は夢のことを考えていた
（光・・・・光が俺の中に入ってきた・・・・
あれは何だったのだろうか・・・・・
このタトゥみたいな龍の模様と何か関係があるのだろうか・・・・）
俺は心の中でそう呟いた
そんなことを考えているうちにまた扉が音を出して開いていき
先生が教室から出て行った

学校が終わり俺はまたあの交差点で信号を待っていた
信号が青に変わり俺は歩き出した
すると道路の真ん中らへんでまたあの声が聞こえてきた

「やっと・・・けた」

俺はまた同じように後ろに振り向いた
しかし昨日と同じでそこには老人の姿は無かった
ただ俺と同じように帰る学生がいるだけだった
今度は信号が変わらないうちにわたった

俺は家の扉を開け中に入った

「ただいま～」
「おう、おかえり」
「早速だけどよこの人がお前の料理食いたいんだとさ」
そこには一人の老人がカウンターに座っていた
「いいけど・・・なんで俺？」
「いやぁなかなか話の合う人でね
お前のことを話したらぜひ食いたいんだと」
老人がにっこりと笑って俺の方に向いた
（親父と息が合うなんてどういう人だ？）
「いいですよ、親父ほどうまくはありませんが」
俺も笑って言った

とりあえず俺は簡単に作れるつまみ何かを作ってあげた
老人はそれを黙々と食べていった
声にも出さず表情にも変化が無い
俺はまずかったのかと思い少し戸惑っていた
すると老人が俺の前で始めて声を出した
「うまいのぉ・・・・もっと欲しいくらいじゃわい」
（え？）
俺はこの声に聞き覚えがあるような気がした
しかし何故か思い出せない・・・・・・

老人が全部食べ終わり席を立った
「でわ・・・また来るかの・・・」
老人はお勘定を置いてゆっくりと店を出て行った
「ありがとございやしたぁ、また来てくだせぇ」
親父がそう言うと
俺は部屋へと戻っていった

第４話（後書き）

感想などよろしくお願いします

第一章終　第5話

俺は自分の部屋へ入るとまた
ベットに寝転がりそのまま寝てしまった

俺は目を覚ました
また夢の中で・・・・・
しかしこの夢は暗闇や光の中ではなく
あの荒れ果てた荒野の上にいた
俺は荒野で立ったまま目を開けた

しかし今回はあの沢山の人が何かと戦っている場面ではなく
一匹の黒い龍が俺の目覚めを待っていたかのようにその場にいた

「汝(なんじ)何を望む」
黒い龍はいきなりそう言った
「・・・・・あぁ、もしかして神(シェン)○？」
「ボールも集めてないのに出てくるなんて、さすが俺の夢」
俺はてきとうに言った
「・・・汝何を望む」
黒い龍は返答もせずに言った
（無視かよ・・・・・）
「望むって何でもくれんの？」
俺はそう聞き返した
「我が与えるものは・・・・・力」
「力？何の力？」
「戦う力、守る力そして・・・・・魔法の力」
黒い龍はそう言ってきた
（・・・・魔法？やっぱりゲームのしすぎかな）

俺は微笑しながらそう思った
「じゃぁ戦う力と魔法で」
俺はどうせ夢だと思い、てきとうに選んだ
「了解した」
そう龍が言ったとたん龍の体が二つの光へと姿を変え
また光が俺の中へと入っていった
突然体が熱くなった
「な、何だこれ・・・・」
俺はわけが分からないままその場で混乱していた
そしてまたこの荒野が崩れていき俺は現実で目を覚ました

ゆっくり起き上がって時計に目をやると深夜の2時だった
親父は今爆睡中だろう
俺は立ち上がって急いで玄関を出て行った

何故だかはわからないとにかく行かなくては
俺はそんな気がしてならなかった
自転車に乗りペダルに力をいれ全力で走った

たどり着いた先はどこかも分からない潰れた工場だった
来た道も分からないほど全力でここへ来た
工場の中に入りあたりを見渡した
人気の無い静けさで不気味に思えてきた
そんな時一つの声が聞こえてきた

「ふぇっふぇっふぇっ待っておったよ」
そうあの老人の声だ
老人がいつのまにか月明かりでよく見える位置に立っていた
「爺さん・・・あんた何者だ?」
「それに俺を待ってたって・・・・・」

俺はそう言った
「わしか？わしはだな・・・・・」
「そうだな、怪物（モンスター）とでも言っておこうか」
老人がそう言った時突如として老人の姿が見る見るうちに変わっていった
老人は・・・いや怪物（モンスター）はまるで話に出てくる吸血鬼（ドラキュラ）のような姿になっていた
俺はわけが分からないままその場に立ち竦（すく）んでいた
怪物（モンスター）はいきなり殴りかかってきた
俺はとっさにそれを避け横へと転がっていった
「い、いきなり何をするんだ！」
俺はそう言った
「いや～ねぇお前にはここで死んでもらうよ」
俺は一瞬言っている意味が分からなかった
しかし次の瞬間いつの間にか俺の目の前にいた怪物（モンスター）が鋭く細い爪を俺目掛けて振り下ろした
俺は近くにあった鉄パイプを握ってとっさに振り下ろされた爪と押し合うような形で抵抗した
「ハッハッハッそんな棒っ切れで何ができるのかね？」
「くっ！」
力の差は歴然だった明らかにこちらの方が不利な体勢で押し合っているため
非力な抵抗など一瞬の防御にしかならなかった
怪物（モンスター）は遊んでいるかのように少しずつ力をいれていった

（やられるっ！）
そう思ったとき右腕の龍の模様が赤く光った
その瞬間体が勝手に動いたのか俺は怪物（モンスター）の爪を弾き返していた
「ちぃ！覚醒していたのか！」

怪物(モンスター)は退いて何やらわけの分からない言葉を発した
「エミウス・トレイ　イリエンド・コウズ　アインディレイ・・・・・・・」
（？？？）
怪物(モンスター)が何かを言っていると怪物(モンスター)の後ろにブラックホールのような物が現れた
「エレンド・ラインスライク　ウォルト・シィン・・・レイス！」
最後の言葉を言い終えた直後あのブラックホールのような物があらゆるものを吸い取り始めた
無論、怪物(モンスター)も吸い込まれていった・・・いや自分から入っていった
俺は近くにあった機械に掴まり必死に耐えていた
しかし俺はその機械ごと浮き上がってブラックホールの中へと吸い込まれていった・・・・・

この出来事から俺の人生は変わっていった・・・・・

第一章終　第5話（後書き）

さぁ何かよくわからずに急展開！
この先どうなっていくのでしょうか！？
それは俺にもまだわかりません・・・・・orz
思いつきで書いていますから^^；

第二章　1話～始まりの印～

俺はあの工場の硬いコンクリートではなく
柔らかい草の感触のある上で目を覚ました

「いって～・・・・・」
どうやら気絶していたらしい、俺は頭をなでた
何処でぶつけたのか頭の上にコブができている

「ん～・・・・・ここは・・・どこ？」
俺は立ち上がってあたりを見渡した
１ｋｍくらいあるんじゃないかと思うほど広い草原と
犬のような獣が三匹舌を出しながらこちらに向かっているだけだった
「ん？・・・犬？」
俺は見間違いかと思い目をこすってもう一度見た
しかし見間違いではなく三匹の獣が凄いスピードでこちらに向かってくる
「な、何だ？」
俺は何がなんだか分からないが体が危険だと感じ取ったのか
獣が来る方向と反対に走った

５分程全力で走ったのだが
俺は三匹の獣に囲まれてしまった
獣の一匹が高く飛んできて鋭い爪を立てて俺目掛けて振りかざした
（あぁ・・・こんどこそやられる）
そう思った時また右手の龍の模様が赤く光った
しかし今度は体が勝手に動いたわけではなく
獣達の動きがスローモーションで見えるようになった
（な・・・遅くなった・・・）

（これなら！）
俺は攻撃してきた獣の腹をアッパーで思いっきり叩き
残りの二匹に回し蹴りとかかと落としをくらわせた

獣達の体は吹き飛んだ獣にしてみれば一瞬の出来事だっただろう
一匹は気絶したが残りの二匹は体勢を持ち直し同時に攻撃してきた
二匹はもの凄い速さで鋭い爪を立て振りかかってきた
どうせまたスローモーションで見えると俺は思っていた
しかし二匹のスピードは変わらなかった
「え！？ちょ！」
俺は反射的に目を閉じてしまった
（あぁ・・・終わった・・・）
俺はあきらめてそう思った時

カキィィィン！！！

鉄と鉄をぶつけるような音が当たり一面に広がった
俺は恐る恐る目を開けた
そこには黒いコートを着た銀色で長髪の男が剣を持って
二匹の獣の攻撃を防いでいた
「大丈夫か？少年」
そう言って銀髪の男は二匹の攻撃を簡単に弾き返した
「あ、ああ？」
俺は何がなんだか分からなかった

「では、少し下がっていろ」
男はそう言い二匹の獣に向かって剣を突き出した
一匹は避けたがもう一匹の足に命中した
攻撃を受けた獣はその場に倒れこんでしまった
避けた一匹が男に向かって噛み付こうと飛び掛ってきた

男はそれを横に避け獣の真横から剣を下から上へと振り上げて
獣の体を真っ二つにした
二つになった獣の体は鈍い音を出して草の上に落ちた
そんな中俺は呆然としていた

足に攻撃を受けた獣がいつの間にかその場から消えていた
「う、上だ！」
俺はとっさにそう叫んだ
男は計算していたかのように上を向いて
目にも止まらない速さで獣を串刺しにした
剣から獣を振り払って俺に近づいてきた
「危ないところだったな、少年」
「あ、ありがとう・・・」
「剣も持たずにこんなところにいるなんて自殺行為だぞ？」
「あ・・・えっと・・・」
「あぁ、私か？」
「私はクレス＝レイフォンド、クレスと呼んでくれ」
「あ、俺は衛藤　明です」
「エトウ？・・・なんだって？」
「明、明でいいです」
「ではアキラ何だってこんな所にいたんだ？」
「それは・・・・何かに吸い込まれて
気が付いたらここに・・・・・」
「ふむ・・・転移魔法か何かだろうな」
（魔法？・・・まだ俺は夢を見ているのか？）
「あの魔法って・・・・？」
「ん？魔法も知らんのか？どこの田舎者だ？」
クレスはそう笑いながら言った
「あ・・いえ実は・・・・・」
俺は今までの経緯（いきさつ）をクレスに話した

「ふむ・・・・」
クレスは何やら考え込んでいた
「君の言うことは信じる、ただ君の言う怪物(モンスター)は聞いたことが無いな」
「そうですか・・・なぜ俺の話を信じるのですか？」
「ん？あぁ、かつてこの世界アーヴァウスは平和だった
しかしどこからきたのかたくさんの怪物(モンスター)がやってきて町や村を襲った
人々が剣や魔法で抵抗したがその抵抗は長くは続かなかった
沢山の人が死に人類は絶滅の危機に迫った
そんな時一人の男がやって来たその男は右手に龍の紋章を宿し
様々な魔法や剣技を身につけていた
その男はどうやら異世界から来たらしい
その男の活躍によりでアーヴァウスは平和を取り戻した」
クレスは長々と語った

「その話があるから俺の話を信じるのですか？」
「いや、それだけではない」
「その右手と左手にある紋章だよ」
「・・・左手？」
俺は左手を見てみた
「な・・・・」
左手にはいつの間にか青い龍が描かれていた
しかも右手の方は黒ではなく赤い龍へと変わっていた
「力と魔法・・・・さらに龍の紋章とくれば信じもするさ」
「・・・・一つ聞いていいですか？」
「なんだね？」
「紋章とは一体・・・・・・」
「紋章は・・・そうだな言ってみれば動物を象(かたど)った印みたいなものだよ」
「印・・・ですか？」

「そうだ、印が赤ければ力　青ければ魔法だ」
「防御は？」
「緑だね」
「クレス、あなたには何の紋章が？」
「私は隼（はやぶさ）の紋章だ」
クレスは右手に着けていたグローブを取って手の甲を俺に見せた
そこには赤い隼の印が描いてあった
「紋章には印されてある動物によって身体能力が上がる効果がある」
「私は隼だから素早い攻撃も回避もできるんだよ」
「俺のは何の効果が？」
「それは私にもわからんよ」
「そうですか・・・・・」
「まぁこんなところで話しているのも何だから
ひとまず近くの村へ行こうか」
「そうですね」
そう言って俺とクレスは村へと向かった
「おっと、忘れていた」
クレスはそう言い串刺しにした獣の方へ引き返した
腰に持っていた短剣を使って倒れこんだ獣の毛皮を剥ぎ取って
持っていた袋に入れたそして獣の心臓を剣で突き刺した
すると獣はしだいに跡形も無く風化していった
「あの・・・今のは？」
「あぁこの怪物（モンスター）＜ハングリーハウンド＞は心臓を刺さないと再生してしまうんだよ」
そう言い今度は二つになった怪物（モンスター）の所へ行き
毛皮を剥ぎ取って心臓を刺した
「では、行こうか」
「あ、はい」
そう言って村へと向かった

「・・・何か忘れているような」
「何をだね？」
「ん～・・・」
俺は手を組んで考えた
その時いつの間にか目の前に一匹のハングリーハウンドがいた
「あ、そうだ！もう一匹いたんだった」
「ふむ・・・では今度はアキラがやってみてくれ」
そう言ってクレスは自分の剣を俺に渡した
「え、えええぇ～・・・・」
俺はどうすれば良いか分からずそのまま戸惑っていた

怪物(モンスター)はそんな事はお構(かま)いなしに飛び掛ってきた
その時また右手の龍の紋章が光った
俺は少し横に移動し怪物(モンスター)の前に剣の刃を向けて
瞬間的に前へとダッシュした
そして怪物(モンスター)は頭の先から尻尾まで横に真っ二つになった
「おぉ～、凄いな初めてとは思えないよ」
クレスはすぐに怪物(モンスター)の毛皮を剥ぎ取ってそう言った
俺は毛皮を取り終わるのを見て心臓に突き刺した
「今度こそ村へ行こうか」
「何ていう村です？」
「インガ村だ」
そう言って村へと歩き出した

第二章　1話～始まりの印～（後書き）

今回は以前に比べて大分長くなりましたね＾＾
これぐらいの長さで良いかなど
ぜひ感想を書いてやってください＾＾

2話～毛皮は高い？～

「なぁクレスさっきの話なんだけど・・・」
「ん？何だね？」
「このアーヴァウスだっけ？平和になったって言ったけど
それなら何で怪物（モンスター）がまだいるんだ？」
俺は歩きながら慎吾と話しているかのように話してみた
「あぁ、そういえば言って無かったね
怪物（モンスター）は死んでもまた現れるんだよ」
「え？じゃぁ倒している意味は無いんじゃないの？」
「うむ・・・確かに倒してもまた現れるが意味はあるぞ」
「どんな？」
「簡単なことだよ、自分が死にたくないとか誰かを守りたいとかそ
ういう事だ」
「？」
俺は言っている意味が分からなかった
「少し難しかったか？なら・・・例えば私がアキラに剣を向けて
［ここで死ね］とか言って殺そうとする
アキラは剣を持っていてアキラの後ろは崖だったとする
こういう場合だったらアキラはどうする？飛び降りるか？そのまま
殺されるか？」
「そりゃぁ・・・戦うでしょ」
「だろう？だから戦って倒す意味もできるわけだ」
「ふぅ～ん」
俺は納得したように言った

「そろそろ村が見えてくるころだぞ」
クレスの言う通り村が見えてきた

村へ行く途中何匹もの怪物（モンスター）が何回か襲ってきた
そのつど俺達は怪物（モンスター）を倒していき毛皮を剥ぎ取っていった
十匹で群れを成して襲い掛かってきた時もあった
さすがにその時は少しやばかったが何とか倒していった
俺は怪物（モンスター）を倒していくうちに少しずつ剣の腕が上達していった

「そうだアキラ、今更だが私とこの世界を旅していかないか？」
「ん～・・・このまま置いて行かれても困るし、こっちからお願いするよ」
「よし、なら決まりだな」
そんなことを話している間に村へとたどり着いた

「まずは手に入れた毛皮を売って宿とお前の剣だな」
ぐぅぅぅ～・・・・
俺の腹が物欲しそうにうなった
「その前に腹ごしらえが先か」
クレスは笑って言った
俺とクレスはとりあえず毛皮を売ってその金で何か食べ物を買おうと決めた
この村の質屋に行き大量に持っていた毛皮を５０００ルースで売れた
「５０００ルースってどれくらい高いの？」
「そうだな・・・この村の宿で２週間くらい泊まれるかな」
「へぇ～そんなに高いんだ毛皮って」
「いや毛皮自体はそんなに高くないけど今回のは少し丈夫なのがたくさんあっただけだよ」
「ふぅ～ん」

ぐぅぅぅぅぅぅ～・・・
今度は二人一緒に腹がなった

俺とクレスはお互いの顔を見て笑った
俺達は市場に行き、肉と野菜それと飲み物を大量に買っていった
「これで1週間は持つだろう」
全部で７００ルース程だった
俺達は宿を探して厨房を借りた
「さてと、誰が作る？」
「俺が作るよ結構うまい方だし」
「そうなのか？では任せた」

３０分くらい経った
机の上にはおいしそうに湯気を出し、半透明なスープの上に浮かんでいるロールキャベツと
薄くスライスしたトマトとオニオン、少し水気を帯びたレタスの野菜サラダが二人分あった
「おぉ～見た目はなかなかだな」
「いいから食おうよ、もう腹へって死にそう・・・・」
「あぁそうだな」
俺とクレスはサラダから食べ進めていった

「なかなかうまかったな」
「あぁ自分で言うのもあれだけどな」
「ふぅ・・・さて腹ごしらえも済んだことだし
そろそろアキラの武器でも買いに行くか」

俺達は村の様々なとこを回りながら
日が暮れるころに武器屋に入っていった
「どんな物をお探しですか？」
武器屋の店主が聞いてきた
「そうだな・・・軽くて丈夫な剣を見せてくれ」
店主は店の奥へと行き１０分程してから

店の奥から出てきて剣を3つ持ってきた
「うちで軽くて丈夫なのはこの3つですかね」
「ふむ・・・・」
クレスは順番に剣の刃先を見ていった
「ではこれを貰おうか」
クレスはそう言い3つの中の1つを選んだ

「それでしたら1900ルースになります」
「む・・・高いな、まぁいいだろそれで買おう」
「まいど～ありがとうございました～」
クレスは買った剣を俺に渡した
「さぁこれはお前の剣だ」
「あぁありがと」
そう言って店を出るともう日が落ちていた
俺達は宿へと向かった
夕食は宿の方から持ってきてくれた
ここの宿は一泊2食付きで400ルースだ
俺達はそれを食べ終え少し話をした
俺の世界のことクレスのことなどだった
話をしてから1時間くらい経って俺達はそれぞれのベッドへと入っていった
この世界に来て初めて眠った・・・・・

2話～毛皮は高い？～（後書き）

今回はあまり良くできませんでしたね＾＾；
次はがんばって書きます

3話～合わない朝食～

俺はまた夢の中で目を開けた
正直厭(あ)きてきた

しかしそこは荒れ果てた荒野ではなく
あたりが黒一色しかないあの暗闇の世界だった
俺はまた歩くのかと思って一歩踏み出した

すると足元にいきなり巨大な魔方陣のようなものが描かれていった
魔方陣は青白く光っており全て描き終わると
一匹の龍が魔方陣の中にいきなり現れた
今度は黒い龍ではなく青い龍だった

「汝は戦う意思があるか」
「???」
青い龍はいきなりそう言ってきた

「我が汝に力を与えよう」
「ん? 力ならもうもらったけど?」

「戦う意思があるのなら我の名を呼べ・・・」
龍は無視して言った
「お～い、聞いてますか～?」

「その時に相応しい力を与えよう・・・」
「・・・・・」
俺はあきらめて黙っていた

「我の名は・・・アムラス！」

そう青い龍が言ったとたんいきなり龍が光りだした
俺は眩しさのあまり反射的に目を強く閉じた

恐る恐る目を開けた
そこは泊まっている宿の天井だった
どうやら現実で目を覚ましたらしい
いやここも現実と呼ぶのはどうかと思うが今は現実だと思うより他はない

俺はベットから起き上がって軽く背伸びをした
「ん～・・・・」
窓から太陽の光が射し込んでいた
まだ眠たかったが顔を洗って眠気を落とした
クレスのベットの方を見てみると
そこにはクレスの姿はなかった

外に出てみると暖かな太陽の日差しと青い空が迎え入れてくれた

「やぁ、起きてたのか」
声のした方へ向くとクレスが袋を持ってこちらに来ていた
「おはよう、それは何？」
「ん、これか？これはヒーリングドロップと言っていわゆる回復薬だよ」
「回復薬？」
「あぁ前にも言った通り怪物（モンスター）は死んでもまた現れるんだ
しかしこちらはやられたらそれで終わりだろう？
そこで魔法師たちが集まって瞬時に傷を癒す薬を作ったんだ
これはその軽量版みたいな物で材料さえあれば誰でも作れる物なん

だよ」
「へぇ～」
そんなものがこの世にあるのかと思いながらも妙に納得していた

「さて、朝食でも取って出発しようか」
クレスはそう言い宿の中へと入っていった
俺も後を続いて宿へと戻った

出てきた朝食は何の魚か分からない魚の塩焼き
いろんな具が入ったスープ、グリーンサラダ、パンが１つだった
これ程までに合わないような朝食があるのだろうか
俺とクレスはそう思いつつも平気で食べ進めていった

昨日の夕食は野菜炒めと出汁（だし）のきいたスープ、ステーキだった
このステーキは怪物（モンスター）の肉なのだそうだ
そんなもの食べて大丈夫なのかと思ったが意外にうまかった
しかし今回は微妙な味だった
魚の方はあまり塩がきいておらず味が薄かった
スープは材料の個々の味はうまいのに沢山入っているせいであまりうまくなかった
パンとサラダだけがうまかった

「さてと・・・そろそろ出発するか」
俺とクレスは宿代を払って外へ出ていった
ここの宿代は一人４００ルースだから二人で８００ルースだった
手持ちの残金は残り２６００ルースだった
「あぁそうだアキラの服も買わないとな」
「俺の？」
「あぁそうだ、次の場所まで結構かかるからなその間に怪物（モンスター）も襲ってくるだろう

そうなると服もボロボロになるかもしれないからね」
そう言ってクレスはこの村の服屋へと歩いていった

「いらっしゃ～い」
「どんなものをお探しですか？」
地味なのしかないかと思ったがいろいろ揃っていた
「アキラの服だから自分で選んでくれ」
「ん～・・・・これかな」
俺は生地が薄いが丈夫そうな赤と黒の色が入った服を選んだ
「それだと６００ルースになります」
俺とクレスはお金を渡して服を持って店を出た
残り２０００ルースになった

俺とクレスは身支度を済ませた
「さて次は町へ向かうぞ」
「その町の名前は？」
「放浪の町ケルマスだ」

3話～合わない朝食～（後書き）

次回は戦闘シーンなども書いていきます＾＾

4話～青龍 - アムラス　覚醒の時～

村を出ると来た時と同じように草原が続いていた

俺は歩きながらあの夢のことを考えていた

「どうした？」

心配そうに言ってきた

「うん・・・昨夜の夢のことでね・・・・・」

「夢？」

「あ、いや、別に気にするほどの事じゃぁないから」

「？」

「それよりクレス、次の町はどんなとこ？」

「放浪の町ケルマス、名前の通り旅人がよくたどり着く町だよ」

「結構にぎやかな場所なんだがあそこらへんの怪物（モンスター）は強くてね

町には門と警備する人がいるんだよ」

「そんなとこへ行くの？」

「あぁ強いと言ってもアキラなら勝てると思うよ」

（思うって・・・・・）

3時間くらい歩き続けたがまだ草原が続くばかりであった

そのうえ腹も減ってきた

「そろそろ何か食べない？」

「そうだな、では昼食を取ることにするか」

俺達は市場で買った果物と村を出る前に焼いてもらった肉を取り出

して食べていった

こんな場所では火を起こせるものも無かったため仕方が無かった

昼食を食べ終わり10分くらい休憩してから町へと向かった

４時間くらい歩くといつの間にか草原を抜け森へと入っていった
森に入った途端怪物(モンスター)が木の陰から出てきた
ハングリーハウンドが２匹とハングリーハウンドより一回り大きい
狼みたいな獣が３匹出てきた
「気を付けろ！あの３匹は＜ハンターウルフ＞と言って
あの２匹よりも早くて強暴だぞ！」
そう言ってクレスは剣を構えた
「わ、わかった！」

ハングリーハウンドはそれぞれ分かれて攻撃してきた
ハンターウルフは動こうとしない
俺は横に避け剣を水平にして真横に振り切った
まだ慣れていない剣を使ったためか前足をかすめただけだった
すぐに怪物(モンスター)は体勢を立て直し鋭い爪を振りかざしてきた
俺は何とか剣でガードし弾き返した

「こんっちくしょう！」
俺はそう言って懇親の一撃を込めて剣を横へ振り回した
怪物(モンスター)はそれを避けまた鋭い爪で攻撃してきた
しかし俺は剣を水平にしながらそのまま１回転し怪物(モンスター)に当て２つに
切り裂いた
クレスの方へ目を向けるとすでに怪物(モンスター)を倒しハンターウルフ１体と
戦っていた
俺は怪物(モンスター)の心臓を突き刺した

次の瞬間ハンターウルフ２体が襲ってきた
俺はとっさにガードしたが衝撃に耐え切れず後ろへ弾き飛んだ
（２体はさすがにやばいか・・・・・）
俺は立ち上がってクレスのもとへ行こうとしたが
ハンターウルフに囲まれてしまった

1匹がすかさず攻撃してきた
ハングリーハウンドより鋭くそして素早くこちらに向かってきた
何とかガードしたがハングリーハウンドより重い攻撃だったため
俺は少し体勢を崩してしまった
その時を待ってたのか2体が鋭い爪を立ててさっきより速くこちらに向かってきた
（だめだ！よけられない！）

≪戦う意思があるのなら我の名を呼べ≫

「！」
突然どこからか声が聞こえてきたような気がした

「アムラス――――！！！」

そう言った瞬間左手の龍の紋章が青く光った
突然俺の足元に魔方陣が現れて怪物（モンスター）を吹き飛ばした

「！！」
クレスは驚いた表情でこちらを見ていた

頭の中に文字が次々と浮かんでくる
俺はその文字を自然と言葉に出していった

「氷帝の神よ　我が行くてを阻む者へ　裁きの雨を――――アイス

レイン！」

そう唱えた瞬間どこからか無数の氷の雨がハンターウルフ2体へと飛んできた

氷の雨はまさしく雹（ひょう）という感じがしたがこれはまるで氷柱（つらら）みたいに鋭く細かった

無数の氷の雨は怪物（モンスター）が避ける間もの無く全て命中した

「風の精霊よ　我が身の糧（かて）となりて　この身に宿せ――――ウィンドウ　ライン！」

そう唱えると突然風を纏（まと）ったかのように緑色の光りが俺の体を包み込んでいた

次の瞬間俺は一瞬でクレスのもとへ行き目にも止まらぬ速さで怪物（モンスター）を切り刻んでいた

それを見ていたクレスは呆然としていた

「ふぅ・・・・」

いつの間にか緑色の光りは消えており俺は疲れたのか少しふらついていた

「ありがとうアキラ、大丈夫か？」

心配そうに言ってきた

「な、なんとか・・・」

「ほれ、これを食べろ」

クレスはそう言ってヒーリングドロップを俺に食べさせた

「しかし・・・あんな呪文どこで覚えたんだ？」

「いや、何か自然に頭の中に浮かんできたんだ」

「ふむ・・・それは龍の紋章の効果かも知れんな・・・・」

「他には何か浮かんでこないかね？」

「いや今は何も・・・・でもさっきの言葉は覚えているよ」
そう俺の頭に留まっているかのようにあの呪文が忘れられない
いつの間にか体力が回復した俺は立ち上がって怪物(モンスター)の心臓を突き刺した
すると赤い宝石みたいなのが１つ怪物(モンスター)から落ちてきた
クレスの方へ向くと怪物(モンスター)の心臓を刺して赤い宝石を取り出していた
「これは何？」
「あぁこれか？これは火炎玉(ファイヤーエレメント)と言って火を起こす玉だよ」
「火を？」
「あぁ強い衝撃を与えると発火するんだ、旅人には必須アイテムだよ」
「へぇ～」
そう言って俺はもう１匹の怪物(モンスター)の心臓を刺した

「さて、今日はここで野宿するか」
その時はもう日も落ちていた
「いいけどさ・・・・怪物(モンスター)に襲われない？」
「あぁこの森にいる怪物(モンスター)は夜になると自分の巣に戻るんだ
だから怪物(モンスター)は日が出ているうちしか襲ってこないんだよ」
そう言ってクレスはその辺から木の枝を探してきて
火炎玉(ファイヤーエレメント)を木の枝に投げつけた
火炎玉(ファイヤーエレメント)は発火して木の枝に燃え移った
クレスは肉と野菜を取り出し焼いていった
肉と野菜が焼けそれを食べていった
「まさか原始人みたいな事をするなんて思わなかったよ・・・・・」
俺は小声で言った
「ん？何か言ったか？」

「いや別に！それより早く食べよう！」

食べ終わってから1時間くらい経った

「さぁ明日は早いさっさと寝よう」

「そうだね」

俺とクレスは荷物を枕代わりにして静かに眠った・・・・・

４話～青龍 - アムラス　覚醒の時～（後書き）

さぁやっと魔法を使えました＾＾

これからどうなっていくのでしょうか・・・ｏｒｚ

5話～紳士？VS謎の男？～

俺は目を覚ました
今回は夢を見ないで
目を開けると木々の間から日差しが差し込んでいた
そばには昨日の焚(た)き火がまだ煙を出していた
俺は立ち上がって背伸びをした

「ん？起きたのか」
クレスは樹の根に座っていた
「おはよう・・・・」
俺は正直まだ眠かった
「朝食でも食べようか」
そう言ってクレスはりんご2つ取り出して俺に1つ渡した
「何だ？物足りないか？」
「いや、これでいいよ」

「さて、そろそろ出発しようか」
朝食を食べ終え10分程してからクレスがそう言った

「どいたどいたぁ！」

「げほぉあ！！・・・・・・」
いきなり樹の上から男の声がしてジャストミートで俺の腹へと入ってきた
俺はその場に倒れこんでしまった
「どけっつったのに」

「な、なんだ君は？」
そこには上下青い服を着てその上から鎧を着た男がいた
「お、まだ人いたか頼むから・・めし・・を・・・く・・・・・れ・・・・・」
そう言っていきなり倒れてしまった
「お、おい大丈夫か！？」
「アキラもしっかりしろ！」
どちらも返答が無かった

ガツガツッガツガツッ・・・ゴクン！
静かな森に食べものを貪る(むさぼ)音しか聞こえない
「すげぇ～・・・・・」
俺は何とか起き上がって本音を口に出していた
3日分くらいあろうかと思う材料が見る見るうちに無くなっていく
主に肉が・・・・・・・・
「ぷはぁ～・・・・・ごっそさん、危うく死に掛けたぜ」
そう言って肉類を殆ど全部鬼のように貪りつくした

「ずいぶんとまぁ、食べたね・・・・・・・・
で、どうして君はこんなところにいたんだね？」
「そりゃぁケルマスに行くに決まってんだろ」
「でも君が来た方向はケルマスとは逆の方向だぞ？」
「いやぁそれがさぁ聞いてくれよぉ」

「昨日の昼に向こうの方の樹の上で昼寝してたんだよ
そしたらいつの間にか荷物が下に落ちちまって
怪物(モンスター)に飯を食われてたんだよ」
「で？そのまま何も食べずにどうしてたのかね？」
「腹ぁ減ってたんだけどよ気を紛らわせようとずっと寝てた
で、今日腹減りすぎて朝早く起きたらこっちに煙が見えてたんで
こっちに人がいるかもしんねぇて思って来たって訳よ」
「ふむ・・・そいつは災難だったな」
「だろう？だから人がいてラッキーだったぜ」

「さて・・・と、飯奢(おご)って貰った礼にとりあえず自己紹介しとくぜ」
「俺の名はレイズ、レイズ＝アスターク」
「私はクレス＝レイフォンド」
「俺は衛藤　明です」
「クレスさんは良いとしてそっちのは変わった名前だな」
「あぁちょっと事情があってね」
「ふぅ～ん・・・まいっか」

「ところでクレスさん、あんた強そうだなちょっと手合わせ願いたいんだが」
「いいけど・・・またどうしてかね？」
「いやぁ実は俺トレジャーハンターでね
次の場所は一人じゃぁちょっと手ごわいんでね仲間を探してんだ
もし俺が勝ったらちょっと手伝ってくんねぇかなぁと」
「ふむ、なるほど・・・では私が勝ったら何をしてくれるのかね？」
「そうだな・・・何でも一つ言う事聞いてやるよ」
「そうか・・・では、やろうか」
そう言って少し広いとこへ場所を移った

レイズは背中に持っていた長い袋を開け全身が赤色の槍を取り出した
「ほう・・・・・槍使いか」
「あぁ、剣もいいんだがこっちの方が俺に合ってるんだ」
「そうか、では始めようか・・・・」
そう言ってお互い静かに構えた

そのまま３０秒くらい動かなかった
その時突然風が吹き木々がざわついた

キィィィン！キィィィィン！

風を合図にしたのか一瞬でお互い間合いを詰めて
槍と剣をぶつけ合った
そしてお互い一歩下がってまた動かなくなった

先に動いたのはレイズだった
鋭い刃先をクレスに突きつけた
槍というだけあって範囲は長く少し離れてても攻撃してきた
クレスはそれをかわし一瞬で間合いを詰めた
「ちぃっ！」
レイズは槍を一旦引き戻し縦に回した
「むっ！」
クレスは一歩引いてそれをかわした
そしてまたお互いに一歩下がり体勢を整えていた

「へっ！やるなクレスさん」

「そっちこそなかなかできるではないか」
そう言ってまたお互いに攻撃し始めた

キィィン！キィィィィン！！

（こんなことしてて良いのかねぇ・・・・）
俺は木の根に座り攻防を見ながらそう思った

（さて・・・そろそろいいころかな）
クレスは一気に間合いを詰めて剣を水平にして横から斬りつけた
「くっ！」
レイズはとっさに槍でガードし弾き返した
「うらぁ！」
レイズは槍を少し短くして横に振り回した
が、そこにはクレスの姿はなかった
「こっちだ・・・・」
声はレイズの後ろから聞こえた
クレスはレイズの背中を肩でタックルした
そして倒れたレイズの首に剣をそえた
「私の勝ちだな」
「くっ・・・・・」
そう言ってクレスは剣をしまった

「あんた！最初手ぇ抜いてたな！」
レイズが立ち上がってそう言った
「あぁ、どれほどの腕前か確かめてみたかったからな」

「さて、後は町に着いてから話そうか」

5話～紳士？VS謎の男？～（後書き）

さぁいきなり何か登場しました
もうきずいてるかと思いますが
レイズは仲間になります
レイズが出した約束のせいで・・・・・

6話～謎の声？～

「さて、ようやく町に着いたか」
俺達は今町の門の前にいる
途中ハンターウルフが大量に襲ってきたが
レイズもいたおかげか意外と早く着いた
もう夕方なのだが普通は3日かかるらしい
クレスが警備兵に門を開けるよう言った
すると門がゆっくりと開いていった
「さぁ、入ろうか」

俺達はとりあえず途中怪物（モンスター）の戦利品をこの町の質屋に売って宿を探した
宿を見つけ部屋へと案内してもらいそこにあったベットに腰を下ろした
「さて、さっきの続きだが・・・・」
「あぁで、あんたは俺に何をしてほしいんだ？」
「ふむ・・・・そうだな・・・」
「では、私達と一緒に旅をしてくれ」
「えええぇぇ！！」
俺は思わず声に出してしまった
レイズも呆然としている
「何だアキラは嫌か？」
「いや・・・そういう訳じゃないけど・・・・」
「なら良いではないか」

「ちょ、ちょっと待てよ！俺の意見は！？」
「レイズ、君が出してきたことだぞ
一度言ったことを無かった事にするのかね？」

「くっ！・・・・・・分かった・・・その代わり条件がある」
「条件？何かね？」
「さっきも言ったとおり俺はトレジャーハンターだ
次の場所の宝を狙ってる、それを手伝ってくれ」
「それじゃぁあの勝負勝っても負けても一緒なんじゃ・・・・・」
俺はそう小声で呟いた
レイズが鋭い目ででこちらを睨んだ
「な、何でも無いです！」

「ふむ・・・・・いいだろう、次の場所とは？」
「アスカロの近くある遺跡の中だ」
「アスカロ？」
「アスカロとは砂漠に位置する場所でね結構近いのだが
怪物（モンスター）が結構強くてねとても危険な場所なのだよ」
クレスが丁寧に説明してくれた
「そんなことも知らねぇのかよ、とんだひよっこだな」
「む・・・・・・そう言う君も空腹で倒れるなんて情けないよねぇ」
「何だとぉ？、やるって言うのか？あぁ！？」

「まぁまぁそれくらいにして、君はどうしてそこに行きたいのかね？」
「そりゃぁお宝があるからに決まってんだろ」
「それをどうするんだね？」
「そんなの売るか私物にするかのどっちかだろ」
「あんな危険な場所にかね？」
「普通はそうだろ、簡単だったらつまんねぇしな
それに情報屋の話だと遺跡の中は罠があって怪物（モンスター）は入れないみたいだぜ」
「その情報確かなのかね？」

「多分な、結構評判良いらしいしな」
「ふむ・・・いいだろう、何時行くのかね？」
「3日後だ、その日に遺跡の周りの砂嵐が止むらしい」
「ふむ・・・・・まぁここからアスカロまでは1日で着くからそんなに急ぐことはない訳だね」
「まぁそういうことだな」
「でわ、明日の午後出発するとしよう」
「あぁ頼む」

（何だか話がついていけないな・・・・・・）
俺はそう思ってしまった

同時刻――――――アーヴァウスのどこか

「龍の紋章を持つ者がケルマスに着いたそうだな・・・・・」
低い声が響き渡る
「は！どうやら次はアスカロに向かうそうです」
「そうか・・・龍の紋章の力が手に入れば、再びこの世を暗黒へと導いてやろうぞ」
「・・・・・・・・」
「次はアスカロだ！アスカロに向かい罠をはれ！」

「紋章を覚醒させよ！」
「は！もうすでに一つは覚醒してるようです」
「一つ？紋章は一つではないのか？」
「どうやらあやつは紋章を2つ持っているそうです」
「はっはっはっ！そうか！それはうれしい誤算だ」
「では行け！」
「は！」

「ふはははははっ！・・・・・・」

――――クレス一行――――

ガツガツッガツガツッ・・・・ゴクン！

俺達は宿が出した夕食を食べていた
例のごとくレイズは鬼のように貪っていた
やっぱり肉類を・・・・・・・

今日の夕食は焼肉に近い物だった
肉はまた怪物（モンスター）の肉であとは野菜があった、唯一違うのはタレだった
タレは妙に赤く結構辛かったがなかなかうまかった
「ふぅ～・・・うまかった～」
「やっとまともな食事が食べられたよ」
「はは、そうだな・・・・・」

「どうしたの？クレス」
「ん？いや、ちょっとな・・・・・」
「？」
「じゃ俺もう寝るわ」
「うんお休み～・・・・・・・って早！？」

2時間後

俺とクレスはベットに座っていた
レイズはというと・・・・熟睡中であった
「ねぇクレス・・・・」
「ん？何かね？」
「聞いたこと無かったけど・・・・」
「？」
「この旅の目的って何？」
「目的・・か・・・・」
「？」
「そうだな・・・少し昔話をしよう」

6話～謎の声？～（後書き）

さぁ何やらクレスが語ろうとしています
正直次の話考えるの結構悩みますw
さてレイズの仲間に加わる？見たいですし
ここで軽く人物紹介します

名前：衛藤　明（１５歳）
職業：中学生？
クラス：魔法剣士　紋章：龍　力と魔法

名前：クレス＝レイフォンド（３５歳）
職業：旅人？
クラス：剣士　紋章：隼　力

名前：レイズ＝アスターク（１８歳）
職業：元？トレジャーハンター
クラス：槍使い　紋章：不明　不明

7話～クレスの過去～

アーヴァウス――――――25年前
クレス10歳

まだ怪物(モンスター)が現れていなかったころ――――――

「お母さ～ん」
「なぁに？」
「これ何～？」
「それは剣よ危ないから戻してきなさい」
「は～い」
そう言って家へと戻っていった
「まったく、やっぱり子供ね」
「あなた～、クレスが剣持ち出すから直しといてね～」
「お～う、わかった～」

同時刻――――――別の場所

「何だあいつは！いきなり現れて！」
「ふはははは！行け！怪物(モンスター)ども！！」
「くっ！きりが無い！」
「焼け！殺せ！食い尽くせ！！この世を暗黒へと染め上げるのだ！

！！」
「ぐわぁ！！」
「ふはははははは！！」

レイフォンド一家――――5日後

「あなた・・・・本当に行くの？」
「あぁ・・・俺も一応剣士の端くれだからな」
「そう・・・わかったわ、でもこれだけは約束して」
「何だ？」
「絶対・・・生きて帰ってくるって」
「・・・・・・・」
「お父さん・・・・・どこに行くの？」
「ん？あぁ・・・・・ちょっとお仕事だよ」
そう言って頭をなでた
「じゃぁねぇ・・・帰ってきたら、どこか遊びに連れてってぇ～」
「・・・・あぁ約束だ、そのかわり父さんがいない間、クレスが母さんを守るんだぞ」
「うん、分かった、僕お母さんを守る」
「・・・そうか、偉いぞ」
そう言ってまた頭をなでた
「あなた・・・・・」
「じゃぁな・・・行ってくる」
「いってらっしゃ～い」
「・・・・・」
そう言って父親は去っていった

「お母さん、僕お父さんみたいな剣士になる！」
「・・・・そうね、お父さんみたいな剣士になりなさい」
「うん！」

更に1週間後――――――

「ねぇ、お母さん」
「なぁに？」
「お父さんまだ帰ってこないの？」
「・・・・えぇ・・・きっとお仕事がんばっているのよ・・・・・」
その時母の手が震えているように見えた
「そうだね、お父さんがんばってるもんね！」
「・・・えぇ、だからまだ待っててあげてね」
「うん！」

ドォォォ――――ン！！！

その時近くの森で大きな音がした
音の正体は大きな火柱だった
「クレス向こうへ行きなさい！」
そう言って草原の方へと指差した
「え・・・でも、行ってどうするの？」
「いいから！早く！そのまま行き続きなさい！！」
「どんなことがあっても走り続けない！！」
「う、うん？・・・分かった」
そう言って草原の方へと走った

ドォォォォォン！！！
ドォォォォォォォォォォン！！！！！
音はしだいにどんどん大きくなっていく

「はぁ・・・はぁ・・・」
走り疲れたのか今はゆっくりと歩いている
「ここで何をすればいいのかな？」

ドォォォォォォォォォォン！！！！！！

思わず振り向いた先には火柱に包まれた家があった
「お母さん！！！」
私は家へと駆け出そうとした

『どんなことがあっても走り続けなさい』

「！」
「・・・・・・・」
私はその言葉を思い出しまた走った

しかし後ろから大量に怪物（モンスター）がやってきていた
その後ろには何か巨大なものがいた
「はぁ・・はぁ・・はぁ・・・」
「何？あれ？怖いよう・・・」

「ん？なんだあの小僧は？ふん構わん！そいつも殺しておけ！」
そして何匹もの怪物（モンスター）が襲ってきた

「誰か～！助けて～！」
「ふははは！誰も気やしないよ坊や！」
「お父さん――――！！」

ザシュゥゥゥウ！！！

そう言った時怪物(モンスター)達が音を立てて目の前で2つに切り裂かれていった
「む？誰だ！？」
目の前には大きな大剣を持ってそれを片手で軽々と振り回す男が立っていた

「大丈夫か？少年」
その男は右手に黒い龍の紋章を宿していた
「う・・・うん・・・・」
「そうか、なら下がっていろ」
「貴様ぁ！調子に乗るなぁ！」

パチンッ！

そう言って巨大な怪物(モンスター)？が指を鳴らした
その時やってきた男の下から火柱が天空へと舞い上がっていった
「ははははは！・・・・ん！？」
男が大剣を片手で上に上げ一気に下へと振り下ろした
すると火柱が縦に割れて掻き消した、そして無傷で男が出てきた
「な、何だ！貴様は！」
「俺か？お前なんかに名乗る義理は無いね♪」
「ふ、ふざけやがって！」
「殺れ！」

そう言った瞬間一斉に怪物(モンスター)が襲い掛かってきた

「ふん！・・・天空より見守りし神よ　今この場に舞い降りて　敵を滅ぼす力となれ――――ギガント　レイ！！！」
そう言った瞬間、巨大な光が生み出され怪物(モンスター)を包み込んだ
「な、何ぃ！？」
そして更に大きくなっていき巨大な怪物(モンスター)も包み込んだ

しばらくして光が消えるとそこにはあの巨大な怪物(モンスター)だけが残っていた
「き、貴様ぁ・・・いったい・・何者だ・・・・・」
「だぁからさっきも言ったろ？もう二度は言わないぜ」
「ふふふ・・・はははは！・・・・・我を倒したところで怪物(モンスター)どもは消えはせん！」
「怪物(モンスター)がいる限り我はまたこの世へやって来ようぞ！！」
「もう、いいよ」
そう言って持っていた大剣で２つにし怪物(モンスター)は消えていった

フハハハハハ！

怪物(モンスター)の笑い声が響き渡った

「さて・・・と、怪我は無かったか？少年」
「う・・うん・・・・・大丈夫」
「そうか・・・・少年にはこれをやろう」
そう言って別に持っていた剣を渡しにくれた
「いいの？」
「あぁもちろん、あとこれもやろう」
男の指から光が出てきて私の中にはいっていった
「なぁに？今の」

「ん？ちょっとしたおまじないさ」
「ふぅ～ん」

「少年、目を閉じろ」
「こう？」
私は静かに目を閉じた
「よく聞くんだ、これからまたさっきのやつが現れたら今度は少年、君が倒す番だ」
「僕が？」
「そうだ、これから不思議なことが起こるが決して逃げちゃだめだ」
「どんな困難でも立ち向かっていけば大丈夫だ」
「うん、わかった」
「そうか、偉いぞ」
そう言って男は頭をなでた
「じゃぁな、元気でな・・・・・」

男がそう言った時小さな風が吹いた
「ん・・・・・・」
目を開けるとそこには誰もいなかった・・・・・

「と、まぁこんなところだ」
「へぇ～そんなことが・・・・・」
「あぁこの剣はその男から貰った物だよ」

「ん～・・・じゃぁ怪物(モンスター)が現れたのは25年前って事？」
「うむ・・・そういうことだな」

（しかし・・・この龍の紋章って・・・・・）
俺は右手と左手を見ながら考えていた

グガァァァ・・・・グガァァァ・・・・・・・　←レイズのいびき

「ははっ・・・私達も寝るか」
「そうだね」
そして俺とクレスは静かに眠った・・・・・・

7話～クレスの過去～（後書き）

随分と長くなりましたw
本当は前編と後編に分けるつもりだったのですが
めんどくさかったので一回で書きました^^

8話～イベント？～

俺は目を覚ました
目を開けるとそこはあの荒野だった
俺の夢はベットでしか見ないのか？

目の前には赤い龍と青い龍がそこにいた
『汝、自らの使命を果たせ』
2匹で喋っているが声は1つしか聞こえない
「はぁ・・・・・前にこの世界が滅びかけた時あんたらを宿した男が来たんだろ？
そして今度は俺に宿ってこの世界に来た・・・・・・・・・・・・
ということは話に出てきたやつを倒せって言う事か？」
『そうだ・・・・・・』
（やっぱりか・・・・・・・またとんでもない話だな・・・・・・・・・）

「そういえばあんたら元は黒い1つの龍だったよな？何で俺は赤と青なんだ？」
『汝が選んだ結果だ』
「あぁそういえばそうか・・・・・・・・・てことは全て選べば黒だったって事か？」
『そうだ』
あぁ・・・・・・どうせなら全部選べばよかったな

「ところで青い方は名前を教えてもらったけど
そっちの赤い方はまだ教えてもらってないな、何て言うんだ？」
『まだその時では無い』
「あぁそう・・・・・・」

「そういやあの・・・・何だ、魔法発動する度にあんたの名前叫ばないとだめなの？」
『心で念じよ、さすればいつでもできる』
「なんだ・・・・・・そうなのか」
そう言い終わった瞬間目の前が真っ暗になった
そしてきがつくと目を覚ましていた

半分起き上がりあたりを見回した
横のベットでレイズがまだいびきを掻(か)いて寝ていた
「ほんとにまぁ良く寝るよ・・・・・」
そう呟いていた
「お？起きてたのか」
クレスが洗面所で顔を洗ってきた
「あぁおはよう」
「朝食でも食べるか？」
「うん、でもレイズが起きてからで・・・・・」
「飯！？」
いきなりレイズがそう叫びながら飛び起きた
「うわっ！」
びっくりして一瞬転びそうになった
「ははは っ」
「ん？どうした？」
「いや・・・・ちょっと驚いただけ・・・・・・」
「ふぅん・・・・変なやつ」
君に言われたくないよ・・・・・・・・・

今日の朝食は味噌汁に焼き魚それにお米めも付いていた
「ここは日本ですか・・・・・・・・・」
「ん？何か言ったかね？」
「いや別に何でも無いよ」

野菜とかならまだわかるが米まであるとは・・・・・・・
「おい！何で肉が無いんだ！？」
3食肉食ってんのかこいつは・・・・・・

「ねぇ・・・・・ほんとにレイズを仲間にするの？」
小声でクレスにそう言った
「あぁなるべく仲間は多い方が良いからな」
「でもあいつの性格相当悪そうだよ」
「良いではないか楽しくて」
「そういう問題なの？」
「まぁこれから怪物（モンスター）も強くなっていくだろうからな」
「まぁ・・・・それもそうだね」
「よしもうこの話はこれで終わりだ」
「わかった」

「あ・・・・・」
「ん？どうしたんだ？」
「いや・・・・別に」
（そういえば親父達今頃どうしてるかなぁ・・・・・・
行方不明とかで問題になってたりして）

「さて、今日はどうする？」
朝食を食べ終え俺達は部屋に戻っていた
「アスカロには明日行けば良いからな今日はする事が無いので皆で決めたいと思うのだが」
「あぁ、俺はパス」
「どうしてかね？」
「今日はちょっと俺行くとこ決めてるから」
「どこ行くの？」

「今日の午後この町でイベントがあるらしいからそっちの方にね」
「イベント？」
「まぁイベントっつっても祭りって言った方がいいか」
「そういえば今日だったかな」
「へぇ～・・・・祭りねぇ・・・・・・・
どんなことするの？」
「どんなことって言われてもなぁ・・・・・・・
何かの大会があったり屋台が並んだり何でも自由？
まぁ言ってみれば稼ぎ時ってやつ？」
「ようするにフリーマーケットとかいろんな大会がある祭りってことだよ」
「やっと理解できたよ♪」
「どういう意味だ！？」
「別に深い意味は無いよ
言った通りの意味さ」
「うがぁっ！」
「まぁまぁその辺で止めないか・・・・・・・
ふむ・・・・では我々も行こうかアキラ」
「そうだね、他にする事無いし」
「じゃ、俺は昼飯まで時間潰してくるぁ」
そう言ってレイズは部屋から出て行った

「さて我々は午後までどうするかな・・・・・・・・・」
「そうだなぁ・・・・・・・・」
「では、ちょっと身体でも鍛えるか」
「えぇ～・・・・・」
「そう文句を言うな、明日は結構歩くし
砂漠だからな下が砂だけに余計に疲れる」
「じゃぁ足？」

「そういうことだ、とりあえずスクワット２００回」
「まじですか・・・・・・・・」
「はいはい、文句を言わずにやる」
「へいへい～・・・・・・・・」

そのころレイズは――――――――

「え～と・・・これとこれ、あとそっちのも頂戴」
「あいよ」
朝食で肉を食べられなかったためか結構な量の肉を買って焼いてもらっていた

買い終わって近くのベンチへと移動した
「いっただっきま～す♪」

クレス達――――――――1時間後

「９５・・・・・・・９６・・・・・・・・・９７・・・・・・・・・・・・・・・９８・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・９９・・・・・・・・・・・・・・・・・ひゃ～・・・・く！」
そう言い終わってその場に倒れてしまった
「おいおい、まだきっちり半分しか終わってないじゃないか」
「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・・もう無理・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・だめ・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・死ぬ・・・・・・はぁ・・・・・・・・・」
「う～む・・・・・・・こりゃ相当だめだな」
「剣よりもまず基礎から鍛えないとこれからやっていけないぞ？」

「そんな・・・・はぁ・・・・・こと・・・・・はぁ・・・・・言われても・・・・・・」
「まぁ今日はもういいから体を休ませなさい」
「そうする・・・・・・・」
そう言ってベットに倒れ込んでしまった
それを見届けクレスはこの部屋に置いてあるティーポットとカップを取り出し
葉っぱを取って紅茶を作って一人で飲んでいた

8話～イベント?～（後書き）

最近事情があって小説書けませんでした・・・・・すいません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2149c/

全ては無・・・

2010年10月11日04時09分発行